

# 『成実論』における三昧

阿 部 真 也

## 1. はじめに

三昧とは、原語 samādhi の音写語である。様々な経典、論書に多くの名の三昧が出現する<sup>1)</sup>。一般的には、空三昧・無願三昧・無相三昧の三三昧が知られる。『成実論』には他では見られない三三昧説もある。本稿では、独自の三三昧を始めとする、『成実論』の三昧説の特色について論じたい。『成実論』は四諦に基づく構成となっているが、三昧説は第五道諦聚に説かれている。

## 2. 『成実論』に出現する三昧

まず、『成実論』に説かれる三昧の名をまとめておく。三三昧が三種ある。一分修三昧・共分修三昧・聖正三昧と空三昧・無願三昧・無相三昧と空空三昧・無願無願三昧・無相無相三昧である。その他に、五聖枝三昧（喜・樂・清浄心・明相・観相）、六三昧（一相修為一相・一相修為種種相・一相修為一相種種相・種種相修為一相・種種相修為種種相・種種相修為一相種種相）、七三昧（初禪・第二禪・第三禪・第四禪・空無辺処・識無辺処・無所有処）がある。三昧の語がつくものは以上六種である。その他、「定」のつくもの等がある。これらの内、今回は三種の三三昧を取り上げることにする。

## 3. 三三昧

一分修三昧・共分修三昧・聖正三昧については次の様にある。

一分修者、若修定不修慧、或修慧不修定。共分修者、若修定亦修慧。是世間三昧、在煖等法中。聖正三昧者、若入法位能証滅諦、則名聖正。何以知之。如長老比丘説、行者以定修心、因慧能遮煩惱、以慧修心、因定能遮煩惱。以定慧修心因性得解脱、性謂断性離性滅性。又若定慧一時具足、故名聖正。如以定慧得解脱名俱解脱<sup>2)</sup>。

一分修三昧は、定あるいは慧のどちらかを修するものである。共分修三昧は、定と慧の両方を修するものである。これは世間の三昧であって、煖等の四善根位の段階にある。

聖正三昧は、法位に入り滅諦を証するので聖正と名づけられる。何によってこれを知るのであるか。長老比丘が説いたようにである。行者は定によって心を修し、慧によって煩惱を断じ、慧によって心を修し、定によって煩惱を断ずる。定慧によって心を修し、性によって解脱を得る。性とは断性と離性と滅性であると。あるいは定慧が同時に具足するから聖正と名づけるのである。定慧によって解脱を得ることを俱解脱と名づけるようにである。

これは定慧にもとづいて分けたものである。定あるいは慧のどちらか一方を修することによって得られる三昧、定と慧の両方を修することによって得られる三昧、定と慧の両方を同時に具える三昧である。他の文献には見られない。

次に空三昧・無相三昧・無願三昧について説いている。

若行者不見衆生，亦不見法，是名為空。如是空中無相可取，此空即是無相。空中無所願求，是空即名無願。是故此三一義。問曰，若爾何故説三。答曰，是空之能。謂応修空，修空得利。謂不見相不見相故無相。無相故不願。不願故不受身。不受身故脱一切苦。如是等利皆以修空故得。是故説三<sup>3)</sup>。

行者が衆生も法も見なかったら、これを空という。このように空の中には相を見ることがなく、故に空は無相である。空の中に願い求める所が無ければ、是の空を無願と名づける。故にこの三は一つである。問う、どうして三と説くのか。答える、空の機能による。空を修すべきである、空を修すれば利を得る。相を見ないので無相である。無相だから願わない。願わないから身を受けない。身を受けないから一切の苦から離れる。この様な利は全て空を修することによって得られる。だから三と説くのである。

他の論書等とは異なる説き方になっている。特に、本来一つであるものを、空の利によって三に分けるとする点が独特である。ここで、『婆沙論』における記述を見て比較することにする。

空三昧については次の様にある。

問空三摩地有空非我二行相，有身見有我我所二行相。此中以何等行相，対治何等行相耶。答以非我行相对治我行相，以空行相对治我所行相<sup>4)</sup>。

問う、空三昧には空と非我との二行相があり、我執には我と我所との二行相がある。どの行相でどの行相を対治するのか。答える、非我で我を対治し、空で我所を対治する。

無願三昧については次である。

期心故者，謂無願三摩地。諸修行者期心，不願三有法故。問彼於聖道亦不願耶。答雖於聖道非全不願，而彼期心不願三有<sup>5)</sup>。

期心の故にとは、無願三昧のことである。諸修行者は期心して、三有の法を願わないからである。問う、彼は聖道でも願わないのか。答える、聖道では全く願わないわけではないが、彼は期心して三有を願わない。

## (146) 『成実論』における三昧（阿 部）

そして、無相三昧は次である。

所縁故者、謂無相三摩地。此定所縁離十相故。謂離色声香味触及女男三有為相<sup>6)</sup>。  
認識の対象の故にとは、無相三昧である。この所縁は、十相を離れるからである。色・声・香・味・触と及び女・男と三の有為相を離れるのである。

十六行相との関連については次の様にある。

謂空三摩地、有空非我二行相。無願三摩地、有苦非常及集道各四行相。無相三摩地、有滅四行相<sup>7)</sup>。

空三昧には、空と非我との二行相がある。無願三摩地には、苦と非常と及び集と道との各々四行相がある。無相三昧には、滅の四行相がある。

空三昧には非我と空の行相があり、無願三昧には苦と非常と集・道各々の四行相があり、無相三昧には滅の四行相があるとす。このように、有部ではこの三三昧は四諦十六行相と関連付けて説かれる。それ故、特別な三昧として論じられている。また、有部においては十六行相を離れて無漏慧は無い、ということは既に指摘されている<sup>8)</sup>。これに対して、『成実論』では空と関連付けて論じられている。しかも、空、無相、無願の順に進んでいく三段階として説かれてもいる。

さらに、『成実論』においても一つ三三昧が説かれている。三重三昧である。

以空見五陰空、更以一空能空此空。是名空空。以無願厭患五陰、更以無願厭此無願。是名無願無願。以無相見五陰寂滅、更以無相不取無相。是名無相無相<sup>9)</sup>。

空によって五陰の空を見て、更に一空によってこの空を空ずる。是れを空空と名づける。無願によって五陰を厭患し、更に無願をによってこの無願を厭う。無願無願と名づける。無相によって五陰の寂滅を見て、更に無相をもって無相を取らない。これを無相無相と名づける。

簡潔な説明である。しかし、先の三三昧と順序が変わっている点が注意を引く。論じる内容が変わったことによって順序が変わったと考えられる。この三重三昧については、『婆沙論』に詳しく論じられ、また『俱舍論』等でも説かれている。『婆沙論』との比較をする。

謂先起空定觀五取蘊為空、後起空空定觀前空觀亦為空。謂觀空者亦是空故。先起無願定觀五取蘊為無常、後起無願無願定、觀前無願觀亦是無常。謂觀無常者亦是無常故。先起無相定觀取滅為寂靜、後起無相無相定、觀無相觀亦是寂靜<sup>10)</sup>。

先に空定を起こし五取蘊を觀じて空とし、後、空空定を起こして、前の空觀を觀じて空とする。空を觀じる者も、これが空であるから、先に無願定を起こして五取蘊を觀じて無常として、後、無願無願定を起こして、前の無願觀もこれを無常と觀じる。無常を觀

じる者も、これが無常であるからである。先に無相定を起こして択滅を觀じて寂靜とし、後、無相無相定を起こして無相觀も、これ寂靜であると觀じる。

『成実論』と重なる部分が多い。空と空空、無願と無願無願、無相と無相無相をセットにして説いている。『婆沙論』には、さらに様々な説明があるが、ここでは触れないことにする。また、『俱舍論』においても『成実論』より詳しく論じられている。

#### 4. 三昧の特質

では最後に、三昧そのものの特質についての説を見ていく。まず、心と三昧は一つであるか、別であるか、という問題について次の様にある。

三昧与心不異。有人説、三昧与心異、心得三昧則住一處。雖有此言是義不然。若心得三昧能於緣中住者、是三昧亦住緣中、亦應更因余三昧住。如是無窮是事不可。若是三昧自然住者心亦如是。不應因三昧住。…（中略）…当知心辺無別三昧、随心久住名為三昧<sup>11)</sup>。三昧と心は別ではない。有る人は説く、三昧と心は別であり、心が三昧を得るのは一處に住するからである。この説は間違いである。若し心が三昧を得て緣の中に住するとすれば、この三昧もまた緣の中に住し、更に別の三昧によって住することになる。この様に果てしない議論になる。三昧は自然に住するとしても同様である。三昧によって住するのではない。…（中略）…心の他に三昧は無い。心が久しく住することを三昧とする。

有部では心心所を一境に住せしめる時に三昧が働くとする。三昧と心を別と見るのである。これに対して、『成実論』では心の他に三昧があるのではなく、心に住しているのを三昧と名づけるとする。もし、心が一境に住するのが三昧であるとする、三昧という心理現象もこれを一境に住せしめるものが必要になり、無窮になってしまうというのである。

次に、三昧の有漏・無漏については次の様にある。

三昧二種、有漏無漏。世間諸禪定是有漏。入法位時諸三昧名無漏。所以者何。是時名為如實知見。爾時二種亦名三昧、亦名為慧。攝心故名三昧、如實知故名慧<sup>12)</sup>。

三昧は二種あり、有漏と無漏である。世間の諸もろの禪定は有漏である。法位に入る時の諸々の三昧を無漏と呼ぶ。それはこの時を如實知見と呼ぶからである。その二種をまた三昧と言ったり、慧と言ったりもする。心を攝するから三昧と名づけ、如実に知るから慧と名づける。

『婆沙論』や『俱舍論』等においては、三三昧を三解脱門とも呼ぶ。三昧は有漏と無漏の両方があり、解脱門は無漏のみである、としている。

(148)

『成実論』における三昧（阿 部）

## 5. むすび

以上、三種類の三三昧を中心に述べてきた。他の文献で見られない一分修・共分修・聖正の三三昧は、定慧に基づく三昧である。一方、一般的な三三昧である空三昧・無相三昧・無願三昧については、その内容の論じ方に特色がある。まず、空に基づく解説である点が挙げられる。これは、『成実論』という論書が空思想を重視していることも理由として挙げられよう。次に、空・無相・無願の順に進む段階となっている点が挙げられる。一つの流れを三段階に区切っているのである。また、『婆沙論』等で論じる順序は空・無願・無相となっていて、説く順序が違っている点がある。これは、内容の論じ方の違いからくるものであろう。

---

※なお、大正蔵の引用に当たっては、SAT データベースを利用した。

- 1) 藤田 (1972), pp. 297-303 参照.
- 2) 大正 32, p. 335a.
- 3) 大正 32, p. 335b.
- 4) 大正 27, p. 538b5.
- 5) 大正 27, p. 538b.
- 6) 大正 27, p. 538b.
- 7) 大正 27, p. 538c.
- 8) 葉 (1992), p. 454 参照. 大正 27, p. 529b.
- 9) 大正 32, p. 335c.
- 10) 大正 27, p. 543b.
- 11) 大正 32, p. 334c.
- 12) 大正 32, p. 334c.

〈一次文献〉

『成実論』 大正 32.

『婆沙論』 『阿毘達磨大毘婆沙論』 大正 27.

〈二次文献〉

福原亮巖 1969 『仏教諸派の学説批判 成実論の研究』 永田文昌堂.

藤田宏達 1972 「原始仏教における禪定思想」 『仏教思想論叢』 山喜房仏書林.

葉徳生 1992 「『大毘婆沙論』における三三昧・三解脱門」 『印仏研』 41 (1): 87-89.

堀内俊郎 2004 「『釈軌論』における三三昧」 『インド哲学仏教学研究』 11: 57-78.

〈キーワード〉 『成実論』, 『婆沙論』, 三昧, 空, 無願, 無相, ハリヴァルマン

(大正大学総合佛教研究所講師)